私の初恋

夕玉　黄華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私の初恋

【Ｎコード】
Ｎ０９７１Ａ

【作者名】
夕玉　黄華

【あらすじ】
兄に恋する美咲。でも、その恋は決して実ることはなかった。あっという間に散ってしまう桜のように儚い初恋に、美咲は今日別れを告げる。

柚月　航

現在２４歳。７歳年上で私のたった１人の兄である。

頭も良くて、スポーツ万能。

昔から羨ましいぐらい何でもできる。

それだけじゃない。

小さいころ近所の男の子によくいじめられていたけど、いつも助けに来てくれた。

昔からとても優しかった。

もちろん今でもそういうところは変わっていないと思う。

何かと気遣ってくれる。

いつだって、私の自慢の兄だった。

だから私はお兄ちゃんが大好き。

こんなことは誰にも言えないけど、お兄ちゃんは私の初恋の人。

初恋は実らないなんてよく言うけど、本当にその通りかも。

私の初恋も絶対に実らないんだろうなぁ・・・。

はぁ。

「なに溜息ついてるんだよ。」

そう言ってお兄ちゃんがいきなり部屋に入ってきた。

「お兄ちゃんっ。」

「そんなに驚かなくてもいいだろ。」

「勝手に入って来ないでよ。」

「せっかく呼びに来てやったのに・・・ 夕飯食べないのか？」

「え？もうそんな時間？」

「早く来いよ。」

「はーい。」

お兄ちゃんに呼ばれて慌てて階段を下りると、
お父さんもちょうど帰ってきたところだった。
「お帰りなさい。」
「ただいま。お？今日は航が作ったのか？」
「そうなのよ。航が作ってくれるなんて母さん嬉しいわ。」
「今日で親孝行ができるのは最後だからだよ。」
そう。お兄ちゃんは明日、結婚して、この家を出て行く。
「寂しくなるなぁ・・・。」
「そうね。」
「なに暗い顔してるんだよ。息子が結婚するっていうのに嬉しくないのか？」
「なあ。美咲。」
「う・・・うん。そうだね。」
嬉しくなんかないよぉ・・・。
「ほ・・・ほら。せっかくお兄ちゃんが作ったんだし。早く食べようよ。」

「それもそうね。」

はぁ。お兄ちゃんがいなくなるなんていやだなぁ・・・。

「それよりおいしい？」

「裕子さんが羨ましいわね。私の夫は何もしてくれないのに・・・。」

お母さんは横目でお父さんを見た。

それに気づいたお父さんが、ごまかすように言った。

「航。裕子さんを大切にするんだぞ。」

「分かってるよ。」

裕子というのはお兄ちゃんの結婚相手の名前。

お兄ちゃんと裕子さんは高校3年生の時のクラスメイトで、

それからずっと付き合っていたらしい。

裕子さんは美人で、性格もいいし、今ではすっかり仲良くなってしまった。

認めたくないけど、お兄ちゃんとお似合いなのかもしれない・・・。

悔しいけど、私に勝ち目なんてなかった。

「お兄ちゃん。」

気が付くと、私はお兄ちゃんの部屋の前にいた。

私・・・何やってるんだろう。

今お兄ちゃんの顔なんて見たら余計辛くなるだけなのに・・・。

「美咲？入って来いよ。」

「綺麗に片付いたね。」

「ああ。結構大変だったけど。」

「ねぇ。お兄ちゃん。」

「ん？」

「本当に結婚するの？」

「いきなり何言い出すんだよ？」

「今ならまだ間に合うよ。」

「美咲？」

「結婚なんてしないで。」

「美咲・・・。どうしたんだよ。」

「私。お兄ちゃんと離れたくない。」

「美咲？」

「お兄ちゃんの馬鹿。私の気持ちなんて何も分からないくせに。」

なに言ってるんだろう。馬鹿なのは私の方だ。

「私はずっとお兄ちゃんのことが好きだったんだから！！」

私もまだまだ子供だなぁ。

こんなこと言っても、お兄ちゃんを困らせるだけなのに・・・。

「美咲・・・。」

言わなきゃよかった。どうせ私なんて・・・。

「美咲。ごめん。俺・・・。」

「もしかして本気にしたの？」

「はぁ？」

「嘘だよ。お兄ちゃんなんて好きになるわけないじゃない。なに本気にしてるの？」

「お前。騙したなぁ。」

「騙される方が悪いの。」

「ったく。心臓に悪いからやめろよ。」

「本気にするなんて思わなかったから・・・。あれ？顔赤いよ？」

「そ・・・そんなことない。」

「お兄ちゃん。」

「何だよ。」

あ。怒らせたかな？

「裕子さんを大切にしてあげてね。」

「美咲・・・当たり前だろう。お前も早く相手を見つけろよ。」

「うるさいなぁ。自分が結婚するからって、よけいなお世話よ。」

「はいはい。」

いつもそう。何か言うと、「相手見つけろ。」最近のお兄ちゃんの口癖。

お兄ちゃんは私の気持ちなんて分かってないんだろうなぁ・・・。

「明日からはなかなか会えなくなるね。」

「寂しいのか？」

「全然。」

嘘。本当は寂しい。お兄ちゃんと離れたくない。でも・・・。

「きっぱり言ったな。」

「お兄ちゃん。今までありがとう。」

「美咲・・・。」

「あ。もうこんな時間だし、そろそろ部屋に戻るね。」

そう言って立ち去った。

ちゃんと笑えていたかな？涙は見られていないよね？

部屋の戻ると、今までこらえていた涙が静かに溢れ出した。

「お兄ちゃん・・・。」

悲しくて、どうすればいいのか分からなくて、

その日の夜はずっと1人で泣き続けていた。

「お早う。」

「うわっ。美咲、お前目が赤いぞ。」

「ほっといてよぉ。」

もう。誰のせいよ・・・。

いつものような会話の後、お兄ちゃんは裕子さんと一緒に、一足早く式場に行ってしまった。

「美咲用意できたの？」

「もう少し待って。」

「早くしろよ。」

「ごめん。服が決まらなくて・・・。」

「何言ってるんだ。今日の主役は美咲じゃないだろ？」

「そうよ。今日の主役は航と裕子さんなんだから。」

「分かってる。」

「航が待ってるわ。早く行きましょう。」

私たち3人は車に乗り、式場へと急いだ。

もうすぐお兄ちゃんともお別れ・・・。

「あ。見て。桜が咲いてる。」

走り続ける車の中から桜の木を指差した。

「もう桜の時期なんだね。」

「ほんとね。」

「私もがんばらないと。」

「え？何か言った？」

「何でもないよ。お母さん。」

「あら？今日はいつもより機嫌がいいじゃない？」

「だって、今日は私のお兄ちゃんの結婚式だから・・・。」

いつまでもこのままではいられない。

私はお兄ちゃんが好き。だから笑顔で見送ってあげよう。

どうかお兄ちゃんが幸せになれますように・・・。

さよなら。私の初恋の人。

そして、さよなら。私の初恋。

結局私の初恋は、決して美しく咲くことはなかった。

あっという間に散ってしまう桜のように儚い初恋に、私は今日別れを告げる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0971a/

私の初恋

2011年10月2日23時46分発行